

加藤友三郎と海軍兵学校

平成29年5月19日
堤 明 夫
(元防衛大学校教授・海将補)

昨年暮れに呉市において有志による「加藤友三郎元帥研究会」が発足したが、筆者も縁があってその賛同人の一人として参画することとなった。

そこでこれを機会に加藤友三郎（以下基本的に「友三郎」と言う）の経歴などについて改めて調べ直してみたが、日露戦争期以降についてはそれなりに纏められたものがあるものの、意外なことにそれ以前の海軍兵学寮（当時）入寮時から巡洋艦「日進」の砲術長であった頃まで、特に砲術を専門とするいわゆる“鉄砲屋”としての友三郎についてのものがほとんどない。

本稿では取り敢えずその前半部分として、現在残されている公文書などにに基づき友三郎の兵学寮入寮から海軍兵学校砲術教授心得となるまでについて、その研究の足がかりとするために簡単に纏めてみることにした。

友三郎が海軍兵学校の前身である築地の海軍兵学寮に予科生徒として入寮したのは明治6年（1873年）10月27日のことである。友三郎は文久元年（1861年）2月22日生まれであるのでこの時まだ13歳⁽¹⁾であった。

海軍兵学寮はそれまで幼年学舎予科生徒の入寮資格が15歳以上19歳以下であったが、友三郎が入寮する明治6年の1月にこれが13歳以上の15歳以下に変更された。⁽²⁾ 海軍の制度の大改革に参画することになる有名なダグラス（Archibald L. Douglas）軍事顧問団一行34名はまだこの時点では日本に到着していないが、明治3年に兵制之儀⁽³⁾が定められて海軍は英国式によることとされ、これにより英国海軍兵学校の例に習い将来海軍将校たる者の教育開始は16歳以降では遅いとされたことは十分推測し得る。

この入寮年齢制限の変更措置によって、前年の明治5年に生地の広島から上京して当時陸軍中尉であった兄の加藤種之助と一緒に築地の本願寺に仮住まいしつつ、就学の機会を模索していた友三郎にも受験資格ができたのである。

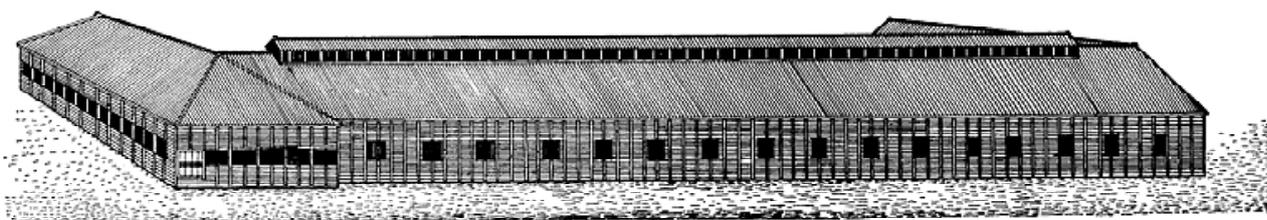
友三郎が海軍兵学寮を受験した際の動機は不詳であるものの、当然既に陸軍中尉であった兄種之助の勧めがあったであろうし、また明治維新後の当時としては旧士族の子弟が進む道として陸海軍将校は役人、起業家と共に大きな受け皿の一つであったことも確かである。このあたりのところは、もう少し後ではあるが司馬遼太郎の有名な『坂の上の雲』でも秋山真之の海軍兵学校進学の話として良く描かれているところである。

兵学寮幼年生徒の志願は当時から士族に限らず一般平民でも志願することができ、明治6年の出願者数は86名であった。そして兵学寮において身体検査（当然素行も）と引続く学術試験により55名が選抜され、10月4日に合格者名が兵学寮から海軍省に報告⁽⁴⁾されている。これが加藤友三郎の名が海軍の公文書に出た最初のものであるが、海軍の文書上の慣例から名簿などに記載される順序は階級や先後任の順であるので、これからすると友三郎の入寮時の成績は55人中33番であったと判断される。

そしてこの年の7月27日ダグラス軍事顧問団が横浜に到着し、東京見物や来日歓迎会などののち8月11日芝の教師館に入っている。この時兵学寮はまだ夏期休暇中であり、それが終わった8月19日からが仕事始めとなり、その手始めとして海軍兵学寮における教育体制の大改革に乗り出すのである。そして早くも10月15日には明治4年に制定された「海軍兵学寮内則」が全面的に改定され「海軍兵学寮假規則」⁽⁵⁾となるなど、10月27日に入寮した友三郎達はまさにその影響を最初から受けた第1期生ということができる。

因みにここまでの海軍兵学寮の経緯を簡単に振り返ってみると、明治2年7月8日に太政官制が2官6部制に改められ軍務官が兵部省となった。そして明治2年9月18日海軍操練所が築地安芸橋近くの松平安芸守下屋敷跡に置かれたことに始まる。（末尾添付図：築地海軍用地沿革図 参照）

ここには幕府の軍艦操練所（教授所）が置かれていたが、元々川を隔てた築地鉄砲洲の講武所内にあったものが火災により焼失したためここに移っていたもので、海軍操練所はその木造平屋の建物をそのまま引き継いで使用した。



（図：明治2年の海軍操練所 「海軍兵学校沿革」第1巻より）

海軍操練所は翌3年の11月4日には早くも太政官布告により海軍兵学寮と改称されたが、これは明らかに同年5月の兵部省の建議書に基づき具現化されたものと言える。⁽⁶⁾

そしてこの時、在籍する生徒間の資質・素行と学力にあまりにも差があったことから、各藩からの海軍修業生たる在寮貢進生に対して選抜を行うと共に、併せて一般志願者たる通学生の制度を廃止した。これにより貢進生53名と通学生149名の合計182名を退学処分とし、代わりに翌明治4年には残った幼年生徒15名、壮年生徒27名の計42名はそれまで食費自費負担であったものを全て官費による養成⁽⁷⁾としたのである。

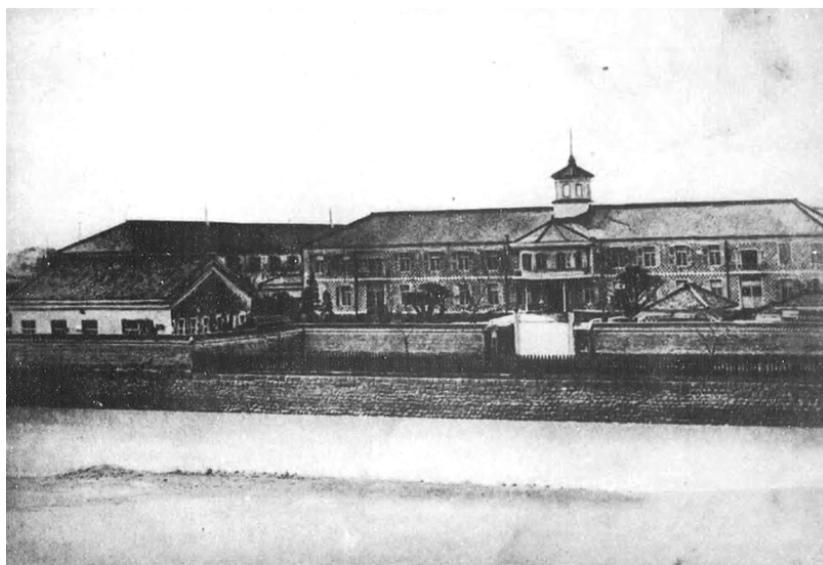
また当時の兵学寮の授業は幼年生徒予科及び本科、壮年生徒ともに期別制ではなく、各

科目ごと能力別のクラス編成であった。これは明治維新直後の日本はまだ小学校や中学校のような公的教育制度ができる前のことであるため、入寮する生徒について各学科で習学程度に差があったためである。

明治5年太政官布告第62号により2月27日に兵部省が廃止され、翌28日陸軍省と海軍省の2つが置かれることとなった。これに伴い同年7月には兵学寮の体制も順次見直しが行われることとなったが、改正については兵学寮に全て任されることとされ、8月4日まず始めにこれまでの幼年生徒の予科・本科を廃して予科生徒とし、壮年生徒を本科生徒と改称した。

なお、海軍操練所創設当初から将来海軍将校たるを希望しない者も入寮させていたが、明治6年には改めて自費生徒という制度⁽⁸⁾が設けられ、入寮年齢制限は同じであるが学費を払えば2年間就学することができた。これは当時商船学校はもちろんのこと（最初の三菱商船学校は明治8年設立）、官制の学校といえばまだ昌平黌と開成所しかなく、あとは攻玉社などの私塾であったことから、修業後に一定年数を文官や技官などとして海軍に勤務することを条件の元に、兵学寮の幼年生徒と同じ教育を受けさせることにしたものである。もちろん本人の希望や成績により途中で海軍修業生に変わることも可能であった。

明治4年から5年にかけて近くの増山河内守上屋敷跡に新たに二階建ての洋風木造学舎を建設し順次ここに移った。友三郎が入寮したのもこの新学舎であった。



（明治5年に新築された海軍兵学寮 「海軍兵学校沿革」第1巻より）

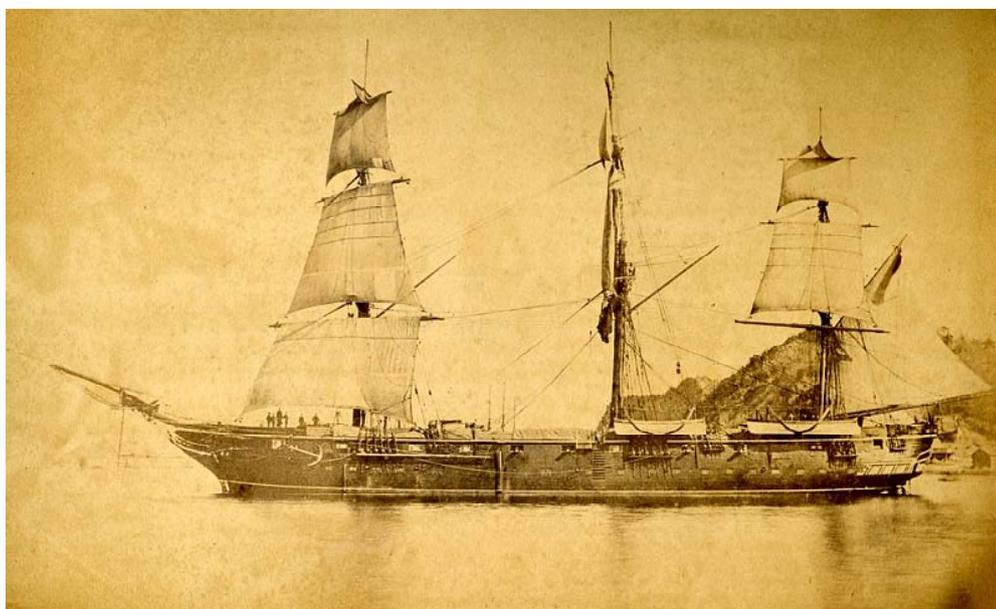
そして翌7年4月友三郎は他の45名と共に予科第2期の修業が命ぜられていることが兵学寮の記録⁽⁹⁾に残されている。なお海軍兵学寮における友三郎のエピソードなどはほとんど残されていないが、当時の兵学寮における様子などについては、友三郎の1年後に入寮した澤鑑之丞の回想録⁽¹⁰⁾などによく描かれている。

明治9年（1876）8月30日新たに「海軍職制及事務章程」⁽¹¹⁾が制定され、これに伴っ

て翌31日に海軍兵学寮は海軍兵学校と改称⁽¹²⁾された。そしてこれまでの「海軍兵学寮規則」はこの31日に自然消滅となり、翌9月1日に新たに「海軍兵学校事務章程」が制定されたが、この第1条において「海軍兵学校ハ海軍出身ノ生徒ヲ教育培養スルノ所トス」としてこれまでより海軍の士官候補生育成の学校としての性格を明確に打ち出したものとなった。⁽¹³⁾

友三郎の名が次に公文書に出てくるのは本科生徒に進級時のもので、明治9年9月に兵学校長から海軍大臣宛てに報告⁽¹⁴⁾がなされており、この中で友三郎は一年あとの明治7年10月に入寮した島村速雄、伊地知彦次郎などと共に併せて34名の中に名を連ねている。

本科に進んだ友三郎は、明治12年9月10日他の運砲科第2先進号生徒30名と共に兵学校航海練習艦の「筑波」に乗組を命ぜられて実地演習に臨んだ。これはダグラスによる改革の一つであり、海軍士官候補生は可能な限り艦船に乗せて実地に教育すべしとの方針に基づくものである。



(横須賀における「筑波」 旧海軍公式写真帳より)

この実地演習の途中、明治13年1月12日に機関術修業のため横須賀海軍兵学分校に派遣され、3月25日に「筑波」に戻っている。これは機関術及び造船術は築地の兵学寮では教授困難なため、明治7年6月3日に兵学校の分校が設置されたものである。なおこの分校は明治14年7月8日機関科士官（当時は機関官）を養成するための海軍機関学校として独立することになる。

そして3月25日「筑波」に帰艦した友三郎達は、約1ヶ月間の準備の後北米方面への5ヶ月間の遠洋航海へ出発した。もちろんこれもダグラス改革の一つで、兵学校における遠洋航海はダグラス着任の翌年7月に海軍卿宛ての進言がなされており、早くも明治8年には山本権兵衛らの乗り組んだ「筑波」による米国西岸サンフランシスコへの5ヶ月半の実地実習が行われた。これが日本海軍における最初の遠洋練習航海とされている。

友三郎達を乗せた「筑波」は明治13年4月29日に品海（品川沖）を抜錨、6月9日カナダ・バンクーバーのエスカイモルトに入港し7月1日同港発、6日サンフランシスコに入港し30日同港発、8月18日ホノルルに入港し25日同港発、9月29日に横須賀に帰着し、10月8日品海へ回航するという航程であった。

そして遠洋航海（実地演習）を終えて兵学校に戻った友三郎他30名は卒業大試験⁽¹⁵⁾を受験し、全員に明治13年12月1日兵学校の学術卒業証書（運用、砲術、航海）が授与され、12月17日海軍少尉補に任ぜられた。

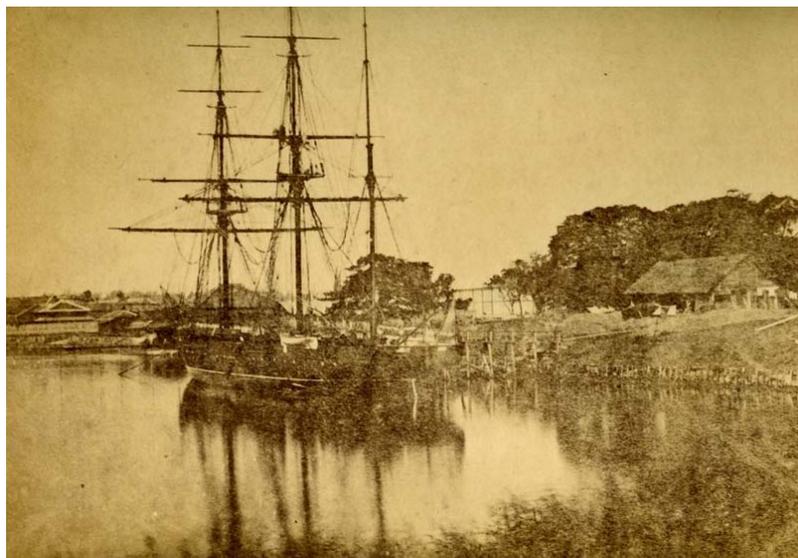
この30名が後に兵学校第7期生として扱われることになるとともに、この中から島村速雄、加藤友三郎、吉松茂太郎、藤井較一の4名もの海軍大将が出ることになる。またこの7期には、日露戦争で名を馳せることになる伊地知彦次郎（「三笠」艦長）、坂本一（「八島」艦長、大連湾防備隊司令官）、浅井政次朗（第一駆逐隊司令）などが名を連ねている。

なお一般刊行物などでは、友三郎は海軍兵学寮入寮時の成績は大したことはなかったが卒業時は島村速雄に次いで2番となり、在校中次第に実力を上げてきたとする向きがあるが、これは正しくもあり正しくもない。

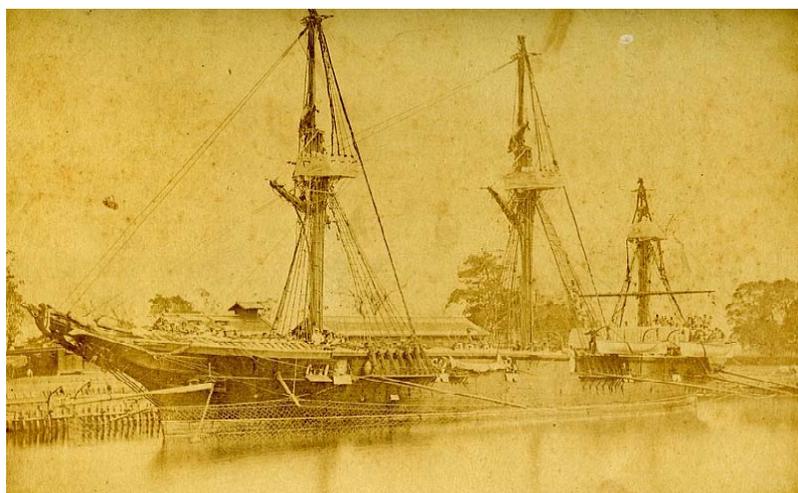
先に述べたように、元々の入寮してくる時の知識レベルは各人各様であるため、入寮時点での期別管理ではなく、各学科は入寮年次に関係しない能力別の学級編成であり、期末の試験での総合成績に応じて進級するシステムであった。このため島村速雄（1858年生）は友三郎より1年後の予科入寮であるが本科へ進むのは同時であり、また友三郎と同じ明治6年予科入寮の山内万寿治（1860年生）、坂本俊篤（1858年生）などは一年早い明治12年の卒業である。したがって単純に兵学寮予科入寮時の55番中33番の成績が卒業時に30人中の2番になったわけではないことには留意する必要がある。

さて、兵学校を卒業して海軍少尉補となった友三郎達であるが、そのまま明治13年12月24日付けで兵学校通学を命ぜられている。この時の教育内容は明らかではないが、おそらくは配属に備えての事前準備期間であろう。島村速雄は翌明治14年4月13日「扶桑」、友三郎他5名は同3月25日「乾行」、吉松茂太郎他2名は同3月25日「筑波」など、それぞれ乗組が命ぜられ各艦に散っていった。

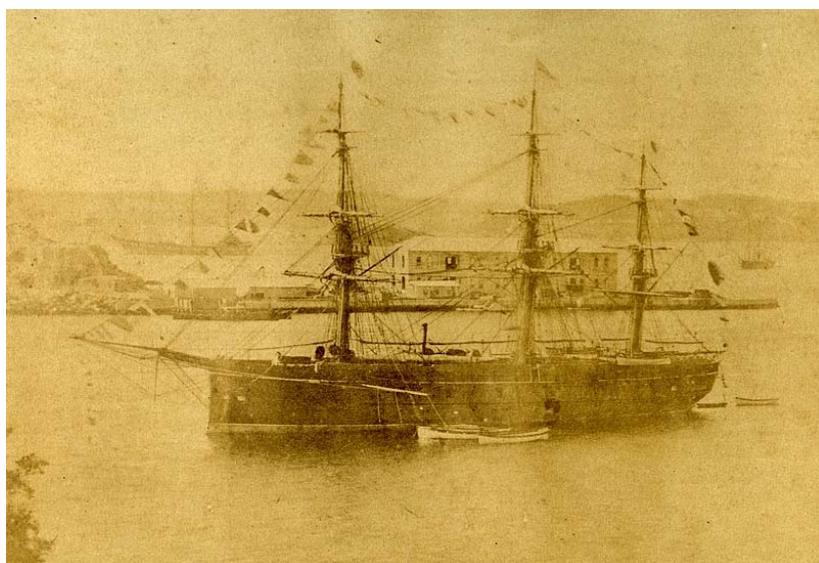
しかし友三郎は更に同年9月12日には「摂津」乗組、続いて翌15年4月17日「龍驤」乗組が命ぜられている。「乾行」など3艦はいずれも兵学校練習艦であるが、「乾行」は当時繫泊練習艦であったものが9月12日付けで廃艦となったために、同日付で同じく繫泊練習艦であった「摂津」へ配乗換えとなったもの。また「龍驤」は航海練習艦であったが明治15年の遠洋航海実施予定であり、友三郎はこれに参加のためのものと考えられる。



(兵学校ポンドに繋留中の「乾行」 旧海軍公式写真集より)



(繋泊練習艦となり帆装用艀装を降ろした時の「摂津」 同)



(横須賀に停泊中の「龍驤」 同)

そして「龍驤」は実地演習の生徒37名を乗せて3ヶ月間の内地巡航を行った後、12月19日品海発で遠洋航海へ出発した。この時の生徒の中には加藤定吉、山下源太郎、広瀬勝比古（広瀬武夫の実兄）、森義太郎などの名前が見える。⁽¹⁶⁾

「龍驤」は明治16年2月8日ニュージーランドのウェリントン着、同24日に同港発4月15日チリのバルパライソ着、5月3日に同港発15日ペルーの首都郊外カラオ着、同20日同港発7月3日ハワイのホノルル着、そして8月5日に同港を出港して9月15日帰国した。

約9ヶ月に及ぶ大変に長期間の遠洋航海であるが、「龍驤」の船脚が遅いためとはいえ、各寄港地での日程も大変ゆったりとしたものである。

友三郎はこの「龍驤」による遠洋航海から帰国後の10月10日に兵学校通学士官を命ぜられている。これは明治12年の「海軍兵学校規則」が明治15年に改訂されて「海軍兵学校條例」となった時に新たに制定⁽¹⁷⁾されたもので、砲術学校などが無かった当時、今日の海上自衛隊で言う初級幹部の「任務課程」に相当するものである。

この時通学士官は兵学校校内にあった旧兵器局の建物に賄いも含めた全て自費による寄宿であったが、明治6年に友三郎が海軍兵学寮に入った時に新築であった校舎はこの時まででに毀損したため（理由不明）、隣の稲葉長門守中屋敷跡に新たに生徒館を建築して明治16年6月ここに移っていた。（本館も新築する計画であったが予算が付かず断念されている。）

なお、この新生徒館は東京でも初の赤レンガ造りの洋風建物であり、当時東洋一の大きさと謳われたとされている。明治21年に海軍兵学校が江田島に移転後にはここに海軍大学校が置かれた。



（海軍大学校時代の海軍兵学校新生徒館 「海軍兵学校沿革」第1巻より）

友三郎は通学士官を命ぜられた直後の16年11月2日晴れて海軍少尉に任官した。時に23歳。ここまでで兵学寮生徒7年、少尉補3年の計10年である。併せて12月25日には正八位に叙せられている。

通学期間中の明治18年3月に三浦半島において陸軍東京鎮台と海軍の中艦隊とによる合同対抗演習⁽¹⁸⁾が行われ、友三郎他の通学士官もこれに参加したとされるがおそらく演習の見学だけであったと思われる。

兵学校における約1年間の研修を終えて17年9月16日から10日間通学士官大試験が行われ、10月6日海軍兵学校通学士官課程の学術卒業証書が授与された。また、この間の10月1日には「摂津」⁽¹⁹⁾乗組が命ぜられている。砲術掛、次いで分隊士であったとされるが、初級将校としての最初の実務である。

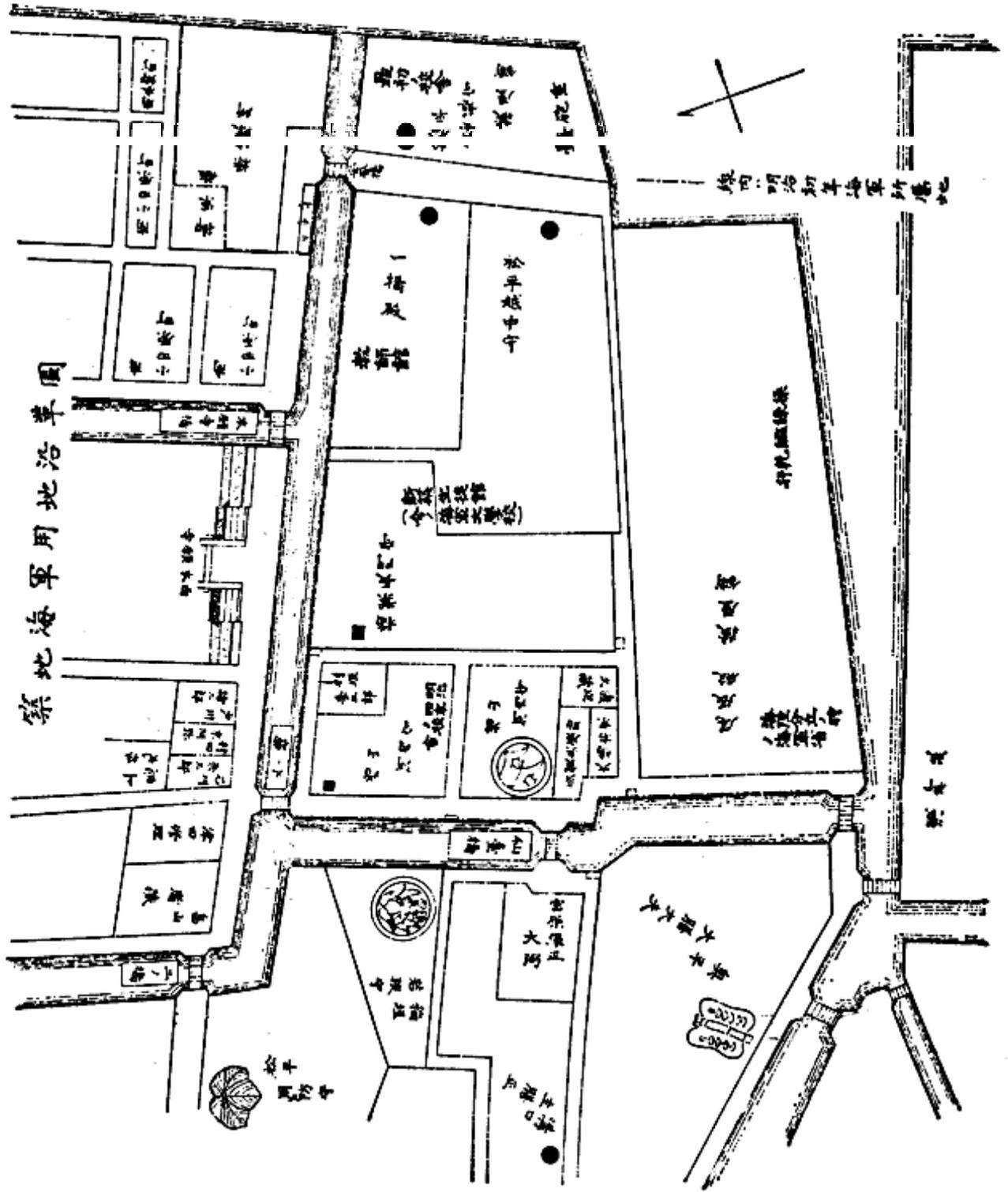
そして約1年5ヶ月後の明治19年2月17日には「海軍兵学校砲術教授心得兼生徒分隊士心得」を命ぜられ、今度は教官として海軍兵学校に戻ることになった。⁽¹⁹⁾友三郎はまだ少尉であるため砲術教授及び生徒分隊士共に「心得」であるものの、この時から名実共に“鉄砲屋”として砲術の道を歩むことになった。

-
- (1)：今日で言う数え年。特に断りがない限り年齢を満で現すようになるのは昭和24年の「年齢のとなえ方に関する法律」(法律第96号)からであることに注意を要する。
 - (2)：明治6年1月10日太政官布告第30号
 - (3)：明治3年10月2日布告
 - (4)：明治6年10月4日付海軍省宛て海軍兵学寮第5号
 - (5)：明治6年10月15日甲三套第2057号別冊「海軍兵学寮假規則」
 - (6)：明治2年から3年にかけて幾つかの海軍振興策が兵部省から出されたが、中でも明治3年5月の建白書『大イニ海軍ヲ創立スヘキノ議』が最も詳細かつ具体的なものである。そして海軍操練所を海軍兵学寮に改めたのはその中の「海士ノ教育」にある“海軍士官ト成ルノ学業深奥ニシテ容易ニ熟達スル能ワス故ニ速ニ学校ヲ創立シ”を受けたものであることは明らかである。したがって、本来海軍操練所を廃し新たに海軍兵学寮を設けたとするのがその真意である。
 - (7)：明治4年1月28日兵部省「海軍兵学料生徒ヲ官費ト為スノ件」
 - (8)：明治6年5月30日甲第118号「海軍兵学寮自費生徒入寮規則」
 - (9)：『海軍兵学校沿革 卷一』(海軍兵学校編、大正9年) p171
 - (10)：『海軍七十年史談』(澤鑑之丞海軍中将、東兆書院、昭和17年)
 - (11)：明治9年8月30日太政官達第95号「海軍省職制章程」
 - (12)：明治9年8月31日海軍大臣達第95号
 - (13)：明治9年9月1日丙第3号「海軍兵学校事務章程」

- (14)：明治9年9月11日付海軍省宛て海軍兵学校「学生第79号」 なお当該文書に出てくる生徒の「第2号」「第3号」区分は学業成績に基づく進級が反映されたもので、必ずしも入校年順によるものではない。
- (15)：明治13年11月5日付兵学校長代理から海軍卿宛て「学生第101号」 卒業成績は島村速雄がトップで、友三郎は2番である。
- (16)：『海軍兵学校沿革 巻一』（海軍兵学校編、大正9年）p319
- (17)：明治15年9月11日丙第67号別冊「海軍兵学校條例」中「第4章 通学士官」 当時の通学士官課程のカリキュラムなどは「帝国海軍教育史」第一巻第6章に記載されているが、個々の通学士官の任命日などは当該期でも一斉ではない。したがって、基本的に自学自習なのか揃っての講義受講方式なのかなどは不詳である。なお、明治16年からはこれに水雷術が追加されている。
- (18)：明治18年の陸軍春季小演習の一貫として行われたもので、三浦半島の観音崎から金田湾にかけて布陣する北軍に対して、海軍は8隻からなる小艦隊を編成し南軍を乗せて館山湾を出撃し上陸作戦を行うと共に北軍陸上砲台砲撃するものであった。
- (19)：「摂津」は明治13年から兵学校繫泊練習艦となっており生徒の实地演習の場となっていたが、乗組士官は兵学校での教務も兼務とされている。
- (20)：明治19年2月17日に海軍省要第36号別冊により「海軍兵学校條例」が全面改訂された。これによりこの年以降予科が廃止されて本科のみの修業4年間とされ、かつ全生徒による6個分隊制とされた。併せて職員の職名及び定員も大幅に改訂されて砲術科は少佐又は大尉の砲術教授長の下に大尉又は中尉の砲術教授6名となった。また生徒分隊士は各科の教授の中から6名が兼務することとされている。したがって友三郎は少尉であり定められた当該職の階級より下位であるため、教授及び生徒分隊士共に「心得」での発令である。

(主用参考文献)

1. 「元帥加藤友三郎傳」 昭和3年、加藤元帥伝記編纂委員編 (非売品)
2. 「海軍兵学校沿革」 大正8年、海軍兵学校編、海軍兵学校
3. 「海軍制度沿革」 昭和7年、海軍大臣官房辺、海軍省
4. 「帝国海軍教育史」 明治44年、海軍教育本部編
5. 「海軍兵学校 海軍機関学校 海軍経理学校」 昭和46年、水交会編、秋元書房
6. 「日本海軍」 平成7年、海軍歴史保存会編、第一法規出版
7. 「図説総覧 海軍史事典」 昭和60年、小池猪一、国書刊行会
8. 「海軍創設史 イギリス軍事顧問団の影」 昭和61年、篠原宏、リプロポート
9. 「蒼茫の海 提督加藤友三郎の生涯」 昭和58年、豊田譲、プレジデント社



(図：築地海軍用地沿革図 「海軍兵学校沿革」第1巻より)